

「探究性」「市民性」「協働性」に関する東大附属中等教育学校生の特徴

—在校生調査と他の調査との比較を通じて—

比較教育社会学コース 本 田 由 紀

The Characteristic Features of Students of the Secondary School Attached to the Faculty of Education, the University of Tokyo
Concerning “Inquiry”, “Citizenship” and “Cooperation”: Through a Comparison between Survey Data

Yuki HONDA

The aim of this paper is to examine the characteristic features of students of Secondary School Attached to the Faculty of Education, the University of Tokyo (SSAFE), which has engaged in comprehensive learning for decades, especially graduation research, under the educational goal to develop “inquiry”, “citizenship” and “cooperation” of students. Through the comparison of the results of questionnaire survey data between the students of SSAFE and students of other schools, the following points were observed; First, SSAFE students show a stronger commitment and inclination to “inquiry” than students of other schools. Second, concerning “citizenship” and “cooperation”, SSAFE students show little special features or even slightly weaker orientations than students of other schools. Third, SSAFE students show more negative attitudes towards traditional types of teaching methods and STEM subjects than students of other schools. Fourth, some characteristic features found out among SSAFE students concerning recognitions of social realities and aspirations. For example, they have stronger recognitions about the social effects of economic capitals, weaker recognitions about the social inequality, poverty and the competition in society, and more confident prospects of their own vocational careers. Fifth, the length of studying time except for school classes of SSAFE students is relatively shorter than students of other schools.

目次

1. 分析の目的と使用するデータ
2. 「子どもの生活と学びに関する親子調査」と東大附属調査の比較
3. 「第5回学習基本調査」と東大附属調査の比較
4. 東大附属在校生の特徴

1. 分析の目的と使用するデータ

本稿は、東京大学教育学部附属中等教育学校（以下、「東大附属」と略記）の在校生に対する調査結果を、既存の民間調査の回答分布を比較することにより、前者の特徴を把握することを目的とする。

東大附属では、「探究性」「市民性」「協働性」の育成を目標とした、総合学習を中核とする独自の教育を長期にわたり実施してきた。具体的な教育内容は、1・2年生における「総合学習入門」、3・4年生における「課題別学習」、5・6年生における「卒業研究」から成る。特に、5・6年生の段階で個々の生徒が独

自の研究テーマに取り組む「卒業研究」は、総合学習の集大成として位置づけられている。

このような東大附属の教育の効果を検証するため、2016年度以降、東京大学教育学研究科学校教育高度化・効果検証センターが主体となり、東大附属の在校生に対するパネル調査（以下「東大附属調査」と略記）が開始された。第1回調査は、2017年3月に、教育学研究科内ネットワークに設置したサーバー上で公開された調査ページに生徒がアクセスする形で実施した。回答者数は各学年約120名で、全体のケース数は722（男子337、女子334、性別不明・無回答51）である。今後、パネル調査データが蓄積されることにより、東大附属在学中の生徒の変化やその要因等の解明が進められていくことが予定されている¹⁾。

ただし、東大附属調査は東大附属中等教育学校の在校生のみを対象としているため、国内の同年齢集団や、設置者等に関して類似する特徴をもつ他の教育機関の生徒と比較して東大附属の生徒がどのような特徴をもつかを、東大附属調査データのみでは確認するこ

とができない。この点を補うため、第 1 回東大附属調査では、より広い層を対象とする複数の既存調査と共通するいくつかの質問項目を採用することにより、東大附属の生徒の特徴を検討することが可能になるように調査票が設計されている。なお、東大附属では、2018年 3 月に作成された『文部科学省研究開発学校平成29年度 研究開発実施報告書（第 2 年次）』において、「探究性」「市民性」「協働性」の概念の内容について検討を行った結果を公表しているが、第 1 回の東大附属調査が実施された時点ではこのような定式化がまだ進んでいなかったことと、上記のような既存調査との比較の必要性から、質問項目は既存調査の中で「探究性」「市民性」「協働性」に関連すると考えられるものを選択して使用した²⁾。

比較対象とする既存調査は、いずれもベネッセ総合教育研究所が実施した、「子どもの生活と学びに関する親子調査（2015年、子ども調査票）」（以下、「生活調査」と略記）および「第 5 回学習基本調査」（以下、「学習調査」と略記）の 2 つの調査データである³⁾。「生活調査」は東京大学社会科学研究所との共同実施である。表 1 には両調査の概要を示した。両調査とも 2015 年夏に実施され、調査方法・対象は異なっている。生活調査は中学 1 年生から高校 3 年生までの各学年のデータがとられており、また在学している教育機関の

設置者別の把握が可能である。学習調査は対象学年が中学 2 年生と高校 2 年生であり、いずれも公立の学校に対象が限定されている。

これらの既存調査データを東大附属調査と比較するため、生活調査については在学校の設置者別の集計を、また学習調査については「大都市」の中高生に限定し、高校生については「偏差値 50 以上」を抽出した集計を、それぞれ調査実施者に依頼した⁴⁾。設置者や地域などの属性を可能な限りコントロールした上で比較を行った方が、東大附属の生徒の特徴をより浮かび上がらせることができるためである。調査設計やケース数の制約により、生活調査では地域によるスクリーニングはできておらず、学習調査では国立や私立のデータが含まれていないことに留意が必要であるが、生活調査を比較対象とすることにより国立中高や公立中高一貫校の生徒と対比した際の東大附属の特徴を、そして学習調査を比較対象とすることにより大都市の中高生と対比した東大附属の特徴を、それぞれ検討することが可能となっている。ただし、調査時期がベネッセの 2 つのデータは各学年の夏時点であるのに対し、東大附属調査は学年末に実施されていることには留意が必要である。

以下、第 2 節では生活調査との比較、第 3 節では学習調査との比較をそれぞれ行い、第 4 節ではこれらの

表 1 比較対象として用いる既存調査データ

調査名	子どもの生活と学びに関する親子調査（2015年、子ども調査票）	第 5 回学習基本調査（中学生版・高校生版）
分析に使用する質問	問 22, 問 23(2)・(3)・(10)・(15)・(19)・(23), 問 28	問 2 A, 問 3 A, 問 7, 問 12, 問 15 A・B・C
調査方法	郵送およびインターネットによる自記式質問紙調査 ※回答者がどちらかを選択。	学校を通じて生徒に回答を依頼した自記式質問紙調査
調査時期	2015 年 7 ～ 8 月	2015 年 6 月 ～ 7 月
調査対象	全国の小学 1 年生～高校 3 年生の子どもとその保護者（小学 1 ～ 3 年生は保護者のみ回答）有効回収率：子ども 74.6%） * 本研究プロジェクトの調査モニター対象	◆中学 2 年生（公立）：全国 3 地域（大都市（東京 23 区内）、地方都市（四国の県庁所在地）、郡部（東北地方）） ◆高校 2 年生（公立普通科）：全国 4 地域（大都市（東京 23 区内）、および東北・四国・九州地方の都市群と郡部）
抽出・集計の依頼内容	中学 1 年生～高校 3 年生：各学年全体および「公立」「公立中高一貫校」「私立」「国立」の生徒についての回答分布	◆中学 2 年生：「大都市」の中学生についての回答分布 ◆高校 2 年生：「大都市」の「偏差値 50 以上」の高校（調査対象は 2 校）の生徒についての回答分布
ケース数	（各学年の全体のケース数） ◆中学 1 年生：1155（男子 571, 女子 584） ◆中学 2 年生：1168（男子 572, 女子 596） ◆中学 3 年生：1199（男子 615, 女子 584） ◆高校 1 年生：804（男子 402, 女子 402） ◆高校 2 年生：802（男子 403, 女子 399） ◆高校 3 年生：854（男子 429, 女子 425）	（各学年の抽出されたケース数） ◆中学 2 年生：810（男子 412, 女子 389, 性別不明・無回答 9） ◆高校 2 年生：626（男子 328, 女子 296, 性別不明・無回答 2）

検討が示唆する東大附属在校生の特徴をまとめる。

第2節と第3節におけるデータ間の比較は次の手順で行う。まず、各比較対象データにおけるもっとも高い学年（生活調査では高校3年生、学習調査では高校2年生。それぞれ東大附属では6年生と5年生に当たる）について、同学年の附属の生徒と回答分布を比較し、もっとも肯定的な選択肢あるいはそれに次いで肯定的な選択肢との合計のいずれかについて10ポイント以上の差が見られる質問項目を抽出する。共通項目の大半は意識項目であるため、肯定率を見ることで東大附属の生徒の意識傾向を把握することができる。また、もっとも高い学年のデータを基準とするのは、当該の教育機関の教育にもし何らかの効果があるならば、それは全教育課程の修了に近い段階において現れると想定されるからである。比較に際して、生活調査については、国立もしくは公立中高一貫校の生徒（高校3年生のケース数は61）を比較対象とする。そして、このようにして抽出された質問項目に関して、各データにおける回答分布に関する学年間の相違を検討する⁵⁾。

2. 「子どもの生活と学びに関する親子調査」と東大附属調査との比較

2.1 東大附属の方が肯定率が上回る項目

本節では生活調査と東大附属調査を比較する。両調査の高校3年生データ（生活調査については国立および公立中高一貫校の在校生を抽出して使用）を使用し、共通する質問項目の中から回答に10ポイント以上の差が見られたものを選び出した。まず、東大附属の方が肯定的な回答の比率が高い質問項目を表2に示す。

「得意」に関する2つの項目および「自分」に関する2つの項目がここに該当する。調べることで、考えを文章にまとめること、興味をもったことに打ち込むこと、挑戦することなど、広い意味で「探究性」に親和

的な項目において、東大附属の6年生は国立・公立中高一貫校の高校3年生よりも高い自己評価を抱えていることがわかる。なお、表には示していないが、生活調査データを設置者別に分析すると、公立や私立の高校の生徒に比べて、特に公立中高一貫校でこれらの項目の肯定率（特に「とても」の比率）がやや高くなっている。東大附属はその公立中高一貫校をも上回っていることから、生活調査が対象とする他の同学年生徒全般と比較しても「探究性」への志向が高い傾向があると言える。

表2に含まれるもう1つの項目は、将来なりたい職業があるか否かという質問に対して「ある」と答えた比率である。職業に関する将来展望の点でも東大附属の6年生は国立・公立中高一貫校の高校3年生よりも明確である者が多いことがうかがえる。やはり表には示していないが、生活調査では、国立や公立中高一貫校よりも一般の公立・私立の高校3年生のほうが、なりたい職業が「ある」比率が58%前後でやや高くなっているが、東大附属の回答はそれらをも上回っており、他の高校3年生全般と比較しても東大附属は職業志望の明確さが相対的に強いことがわかる。

続いて、表2の5項目について、中学1年生から高校3年生（東大附属では1年生から6年生）の各学年について、肯定率を比較した結果が図1～図5である。ほぼすべてに共通する傾向として、次のことが指摘できる。東大附属は1年生の時点で国立・公立中高一貫校の中学1年生よりもこれらの項目の肯定率が高い傾向にある（職業志望については東大附属が下回る）が、2年生から5年生にかけては東大附属と国立・公立中高一貫校との間でこれらの項目にはほとんど差がなくなるか、むしろ東大附属で肯定率がやや下回る傾向さえ表れる。しかし、最終学年時点において再び東大附属の肯定率が大きく上昇して公立・中高一貫校を上回るようになる。

先述のように、生活調査は各学年の夏時点で実施されているのに対し、東大附属は年度末（6年生に関し

表2 東大附属の方が生活調査よりも肯定率が高い項目（高校3年生）

項目	生活調査	東大附属
・得意：わからないことや知らないことを調べる（とても+まあ）	59.0%	72.2%
・得意：自分の考えを文章にまとめる（とても+まあ）	42.6%	63.5%
・自分：興味を持ったことに打ち込む（とても）	49.2%	60.0%
・自分：難しいことや新しいことにいつも挑戦したい（とても+まあ）	60.7%	73.9%
・将来なりたい職業：ある	52.5%	65.2%

ては卒業直前)に実施されているという、調査時期の違いには留意する必要がある。また、図1～図5は単時点の調査における学年別の集計にすぎず、特定の個人の変化を示すものではない。すなわち、個々の学年の生徒集団の偶発的な特性が反映されている可能性にも注意が必要である。

それらの点をふまえつつ、東大附属の1年生と6年生でこれらの項目の肯定率が高くなっていることの背景について解釈を試みるならば、第一に、1年生時点に関しては、総合学習に力を入れているという東大附属の教育の特徴を知った上で入学してきている生徒は、もともと「探究性」について高い自己評価をもっていたか、もしくは入学決定から直後にかけて予期的社会化もしくはチャーター効果(Meyer 1970)により「探究性」に親和的な意識をもつようになっていたことが反映されているのではないかと推測される。

第二に、6年生時点に関しては、東大附属の5・6学年で取り組む「卒業研究」を完遂したことが、「探究性」への高い自己評価につながっているのではないかと考えられる。言い換えれば、東大附属における「卒業研究」は、生徒の「探究性」を高める上で効果をもっていることが推測できる。ただし、ここにも、特徴的な教育課程をもつ東大附属を修了したということ自体がもつチャーター効果が含まれている可能性は否定できない。

第三に、2年生から5年生で東大附属の生徒の肯定率が低迷することについては、多くの中高一貫校で指摘される「中だるみ」、東大附属の3・4年生が取り組む「課題別学習」の改善の余地、入学時や卒業時に表れやすいチャーター効果の欠如など、複数の要因を想定することができるが、そのいずれであるかを特定することは本稿の範囲を超える。

図1 「わからないことや知らないことを調べること」

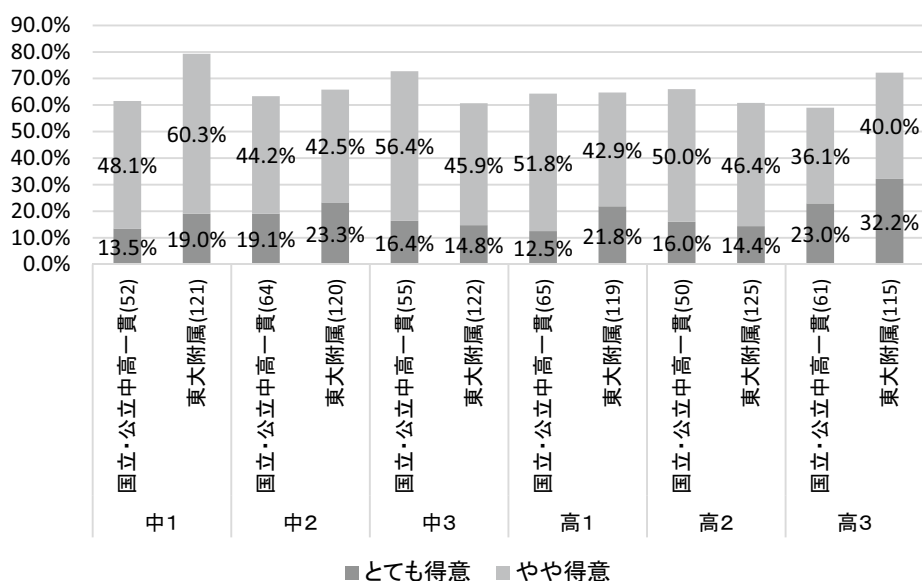


図2 「自分の考えを文章にまとめること」

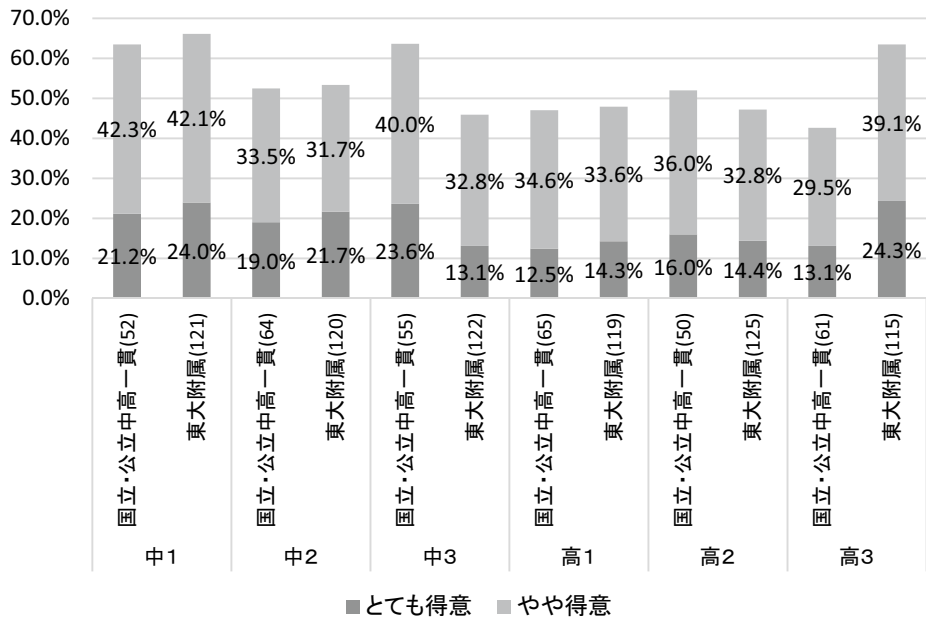


図3 「興味をもったことに打ち込む」

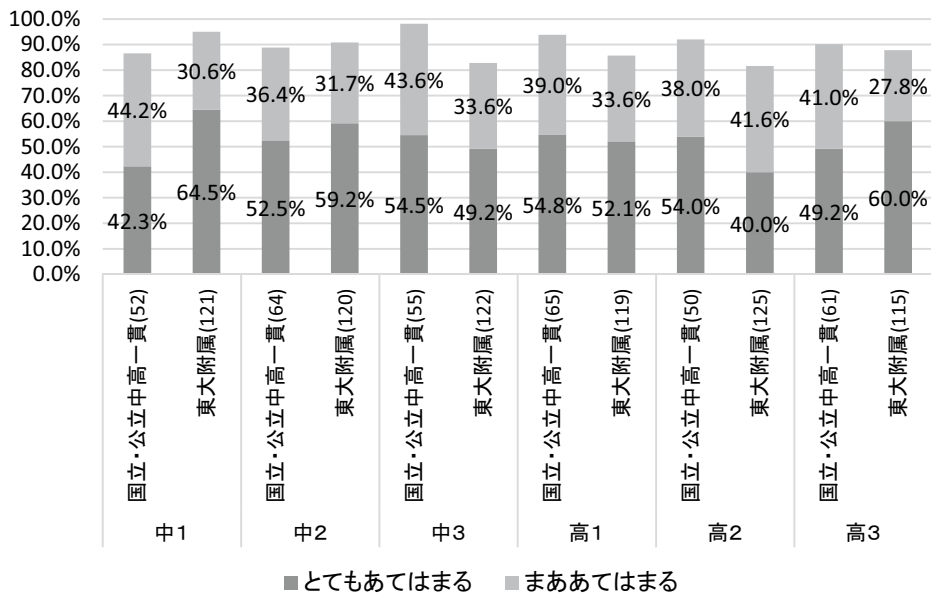


図 4 「難しいことや新しいことにいつも挑戦したい」

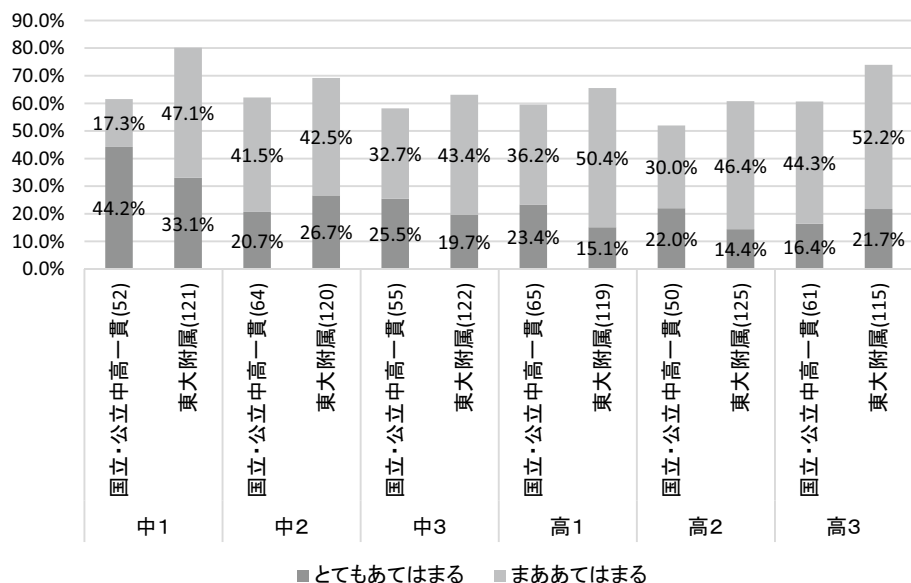
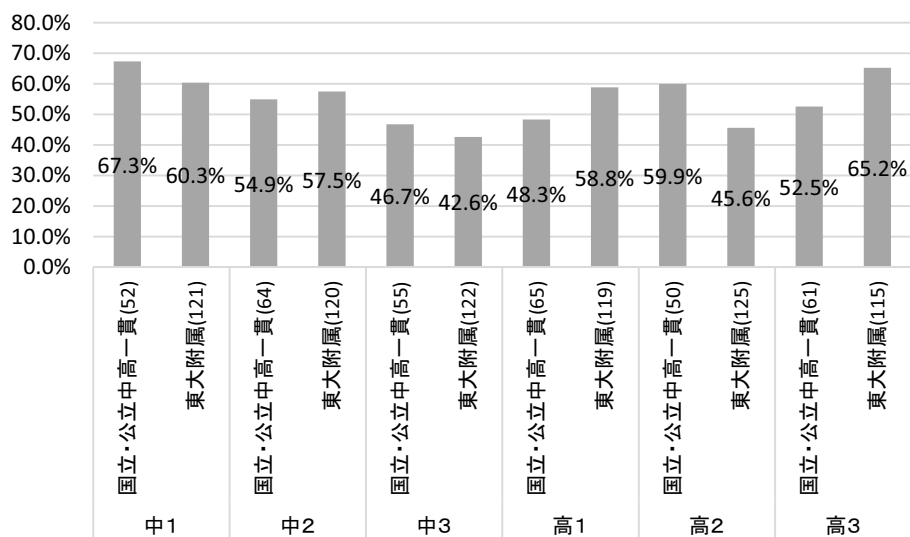


図 5 「将来になりたい職業：ある」



2.2 東大附属の方が肯定率が下回る項目

前項とは逆に、東大附属の6年生の肯定率が、生活調査の国立・公立中高一貫校の高校3年生の肯定率を下回る項目を抽出した結果が表3である。

1つ目の項目である楽器演奏や歌については、「探究性」「市民性」「協働性」と強い関連があるとはいいにくい項目である。また、2つ目の「発表」については、「探究性」「市民性」「協働性」のいずれかと強く関わるというよりも、いずれにも一定の関連性をもつ項目と考えることができよう。そして、3つ目の「人の役に立つことはうれしい」は、「協働性」もしくは「市民性」に関わる項目とみなすことができる。

前節では東大附属の6年生における「探究性」の高さが見いだされたが、表3の「発表」および「人の役に立つ」の2項目についての肯定率の相対的な低さからは、「探究」した成果を他者と共有したりその成果を他者に役立てたりすることよりも、「探究」そのものに対して東大附属の6年生が高い価値を見出していることがうかがわれる。

なお、生活調査データを設置者別に分析すると、「発表」については公立中高一貫校の高校3年生の肯定率（「とても」）が約30%ときわめて高く、国立および他の公立・私立の高校3年生の肯定率（「とても」）はいずれも12%台である。東大附属はこれら多様な設置者の他の高校と比べても肯定率が低い。また、「人の役に立つ」については、肯定率（「とても」）のみについて見れば東大附属46%、国立・中高一貫校39%で、むしろ東大附属がやや上回っているが、肯定率（「まあ」）の比率が東大では少ないために、「とても」と「まあ」の合計で見ると東大附属が少ない結果になっている。肯定率（「とても」）は公立中高一貫校で51%ときわめて高く、国立では20%、公立・私立では40%前後であるため、この項目について東大附属が著しく低いわけではないことが確認される。

これら3項目について、学年別の肯定率を図6～図8に示した。

図6の楽器・歌については、東大附属のほうが肯定率が下回る学年のほうが多いものの、学年間で一貫し

表3 東大附属の方が生活調査よりも肯定率が低い項目（高校3年生）

項目	生活調査	東大附属
・得意：楽器を演奏したり歌を歌ったりすること（とても+まあ）	67.2%	53.0%
・得意：自分の考えをみんなの前で発表すること（とても）	23.0%	8.7%
・自分：人の役に立つことはうれしい（とても+まあ）	96.7%	84.3%

図6 「楽器を演奏したり歌を歌ったりすること」

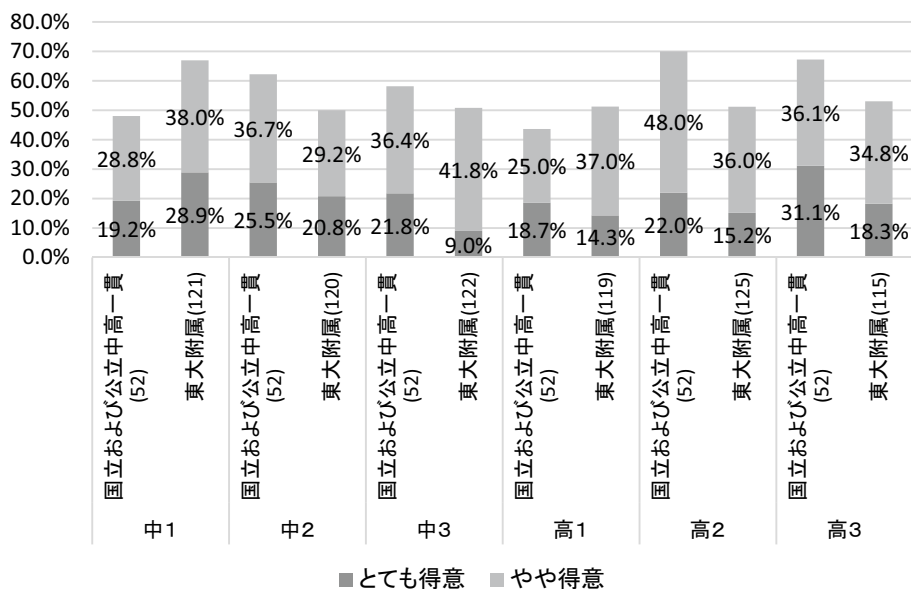


図 7 「自分の考えをみんなの前で発表すること」

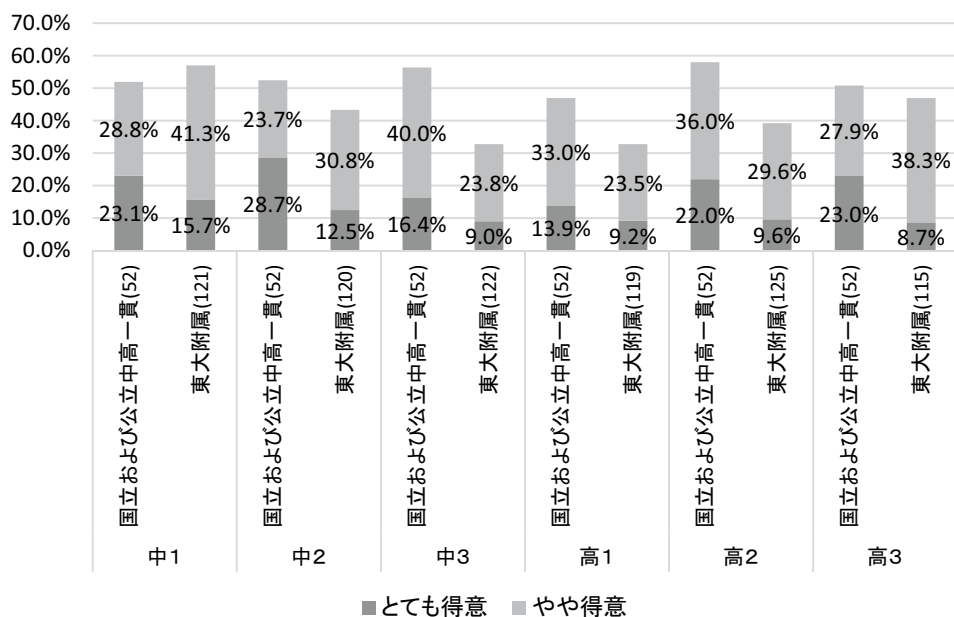
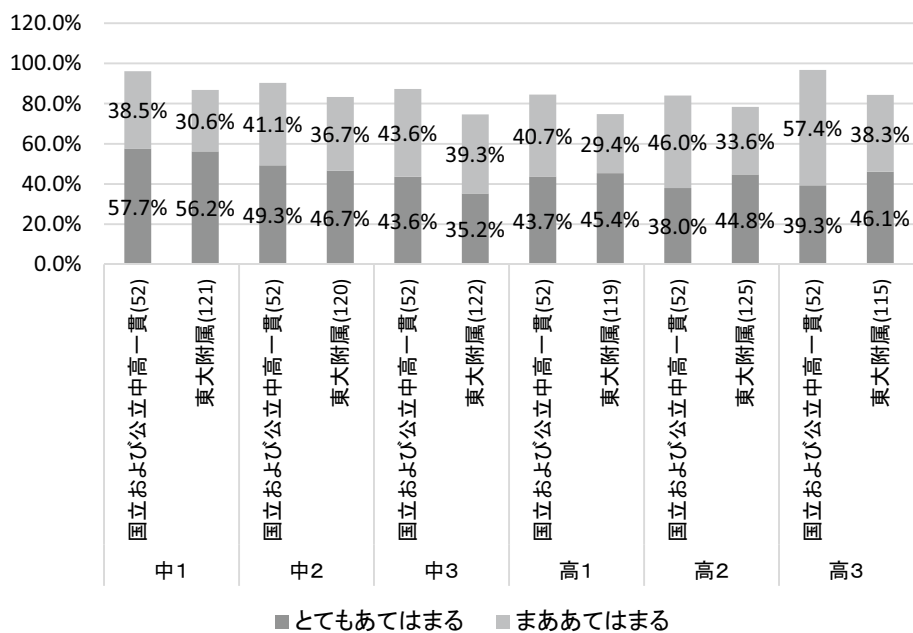


図 8 「人の役に立つことはうれしい」



た傾向は見られないため、特定の生徒集団の特性の反映ではないかと考えられる。

図7の「発表」については、「とても」の比率に注目するとすべての学年で東大附属のほうが国立・公立中高一貫校を下回っているため、もともと入学時点で発表の得意さを重視しない選抜がなされていること、加えて在学中にもそれを大きく回復するような変化が生じていないことがうかがわれる。

図8の「人の役に立つ」については、「とても」の比率で見ればやや東大附属が上回るかほとんど差がない学年も多く、「とても」と「まあ」の合計で見ても全学年でやや低めではあるが、きわめて顕著な差とは言えない。

3. 「第5回学習基本調査」と東大附属調査との比較

3.1 東大附属の方が肯定率が上回る項目

本節では、学習調査と東大附属調査の比較を行う。まず、学習調査の対象者の最高学年である高校2年生（大都市の偏差値50以上の高校の生徒を抽出）と、東大附属の5年生を比較し、後者の方が肯定率が上回っている項目を選び出した。その結果が表4である。

表4の全9項目のうち、7項目までは、どのような教科や授業が好きかをたずねた質問である。一見して明らかなように、「総合的な学習の時間」および「調べる」もしくは「調査」という言葉を含む項目が7つのうち全てを占めている。先に3.1では「得意」かどうか、自分に当てはまるかどうかという角度から東大附属の生徒の「探究性」への志向性が高いことを確認したが、表4からは「好き」という側面からもやはり東大附属では「探究性」が顕著に強いことがわかる。

なお、3.2では「発表」の得意さについては東大附属の肯定率が低いことを指摘したが、表4では「考

えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表する授業」について「とても好き」+「好き」と回答する比率は学習調査よりも明確に高くなっている。「得意」ではないが「好き」ではあるということをどう解釈するかについて、一つの推測は、「得意」と自己評価する際の基準が東大附属では高く設定されているため、控えめな自己評価結果になったのではないかということである。

他方で、残る2つの項目はいずれも「お金」すなわち家計のゆとりがもたらす帰結に関する内容であり、東大附属の生徒は「お金」と「幸福」の関係および「お金」に基づく世代間再生産について、「そう思う」と答える比率が高い。これは価値的な肯定ではなく現実認識としての肯定に関する質問項目であることから、東大附属の生徒は社会の現状としてそのような傾向があると考えていることになる。後述するように、貧困に関する現実認識および自身のアスピレーションとしての地位達成については、東大附属でむしろ肯定率が低いため、整合的な解釈が難しい。ここでは回答傾向のみ指摘するに留める。

これらの項目について、中学2年生（東大附属では2年生）時点の回答も併せて示したものが図9・図10である。

図9における「探究性」に関する7項目について、ほぼ項目間で共通に指摘できることは、中学2年時点においても東大附属の生徒は大都市の中位以上の偏差値の高校の生徒と比較して各項目の肯定率が高いこと、高校2年生時点になると学習調査の対象者では中学2年生よりもかなり肯定率が下がるが、東大附属では高校2年生時点でも肯定率が相対的に高い水準で維持されているため、高校2年生段階で両者の差が大きく表れるということである。

図9の結果からも、東大附属における「探究性」へ

表4 東大附属の方が学習調査よりも肯定率が高い項目（高校2年生）

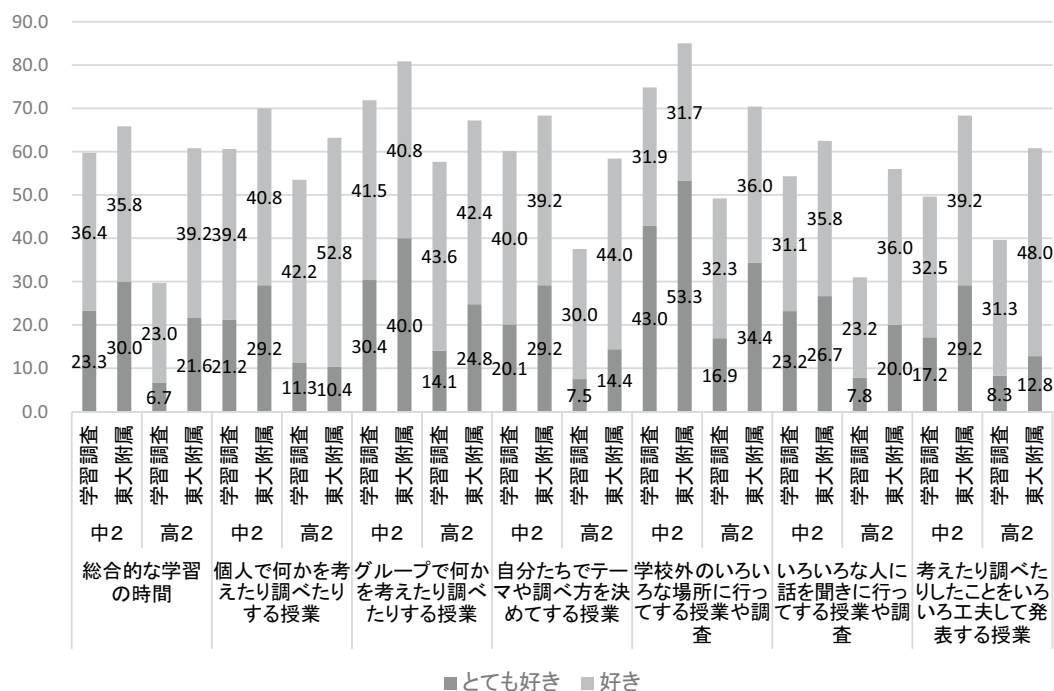
項目	学習調査	東大附属
・好き：総合的な学習の時間（とても）	6.7%	21.6%
・好き：個人で何かを考えたり調べたりする授業（好き）	42.2%	52.8%
・好き：グループで何かを考えたり調べたりする授業（とても）	14.1%	24.8%
・好き：自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業（とても+好き）	37.5%	58.4%
・好き：学校外のいろいろな場所に行っている授業や調査（とても+好き）	49.2%	70.4%
・好き：いろいろな人に話を聞きに行っている授業や調査（とても+好き）	31.0%	56.0%
・好き：考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表する授業（とても+好き）	39.6%	60.8%
・お金がたくさんあると幸せになれる（とても）	23.5%	35.2%
・お金持ちの家の子どもは、将来お金持ちになりやすい（とても+まあ）	55.8%	68.0%

の親和性が確認されたと言える。

図10の2項目については、中学2年生段階では学習調査と東大附属調査の差は小さくなく、「とても」の比率に注目すればむしろ東大附属の方が肯定率がやや

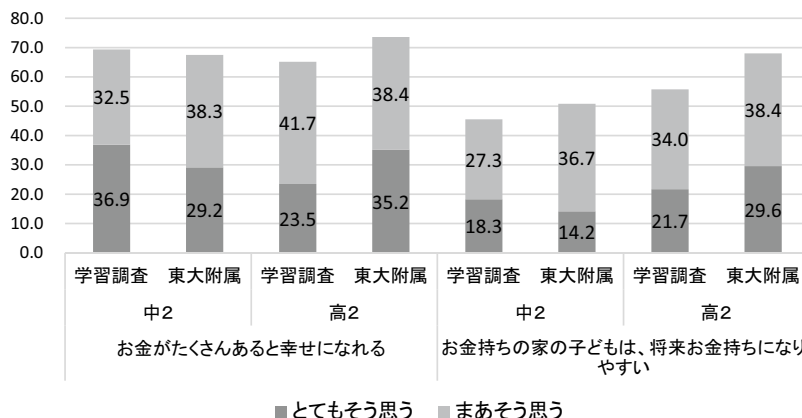
低い。しかし高校2年生時点では先に見た通り東大附属のほうが肯定率が高くなっている。おそらく、附属において3年生から5年生までの教育内容の中に、家計の富裕さがもたらす帰結に関連する内容について学

図9 「好きな教科・授業」



注：「総合的な学習」については「とても好き」「まあ好き」

図10 次の意見をどう思うか



習する機会が含まれていたのではないかと推測される。

3.2 東大附属の方が肯定率が下回る項目

続いて、学習調査における大都市の中位以上の選抜度の高校2年生と比較して、東大附属の5年生の方が肯定率が低い質問項目を、表5にまとめた。

教科や授業が「好き」かどうかについては、数学・理科という理系の教科について、また黒板やドリル・プリントを使うような伝統的な授業方法について、東大附属では「好き」と答える比率が低い。伝統的な授業方法への肯定率の低さは、「探究性」の高さの裏返しと解釈できる。他方、理系の教科について「好き」である比率が東大附属で低いことは、「探究性」の内容が相対的に文系的なものに重点が置かれているのではないかと考えられる。

それに続く7つの項目は、「あなたは勉強していて、次のように感じるがありますか」というリード文の質問に含まれる項目であり、「よくある」「時々ある」「あまりない」「全然ない」という4つの選択肢から選ぶ形である。7つのうちはじめの3つは理系の教科について「すばらしい」「ふしぎだな」と感じるかどうか、次の1つは数学の問題の解き方を工夫するのが好きかどうかに関する項目であり、やはり理系の教科に対して東大附属の生徒は比較的兴趣が低いことがうかがえる。

それに続く3項目は、気持ちや考えを出し合うこと、英語での海外とのコミュニケーション、貧困や差別の現状認識に関する項目であり、「探究性」よりは

「市民性」「協働性」に近い内容とみなすことができる。最後の3項目は、「次の意見をどう思いますか」というリード文の質問に含まれる項目であり、選択肢は「とてもそう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「ぜんぜんそう思わない」である。内容はそれぞれ、友だちがいると幸せになる、日本の競争の激しさ、一流の会社や仕事への志望に関する事柄であり、「探究性」「市民性」「協働性」のいずれと関連するかの判断は難しいが、「友だち」はどちらかと言えば「協働性」に近い内容と解釈できる。

気持ちや考えを出し合うこと、友だちがいると幸せになれることへの肯定率が東大附属で低いことは、対人関係面で比較的クールであることをうかがわせる。あくまで推測ではあるが、東大附属の5・6年で取り組む「卒業研究」が個人別のテーマを追究するものであることから、集団や他者に同調する志向が抑制されるのではないかと考えられる。

他方で、貧困・差別や競争への認識が低いこと、一流の会社や仕事へのアスピレーションが東大附属で低いことについては解釈が難しいが、東大附属の生徒が相対的に安定した家庭や学校の環境の中で生活できていることや、社会の中で支配的な価値序列の中での競争や勝利よりも自分自身の関心や興味の追究に重点を置いていることを反映したものではないかと推測される。

図11～図13は、これらの項目について、中学2年生（東大附属では2年生）のデータも併せて示したものである。多くの項目では、中学2年生時点ですでに東大附属のほう肯定率が低い傾向があり、それが高校

表5 東大附属の方が学習調査よりも肯定率が低い項目（高校2年生）

項目	学習調査	東大附属
・好き：数学（とても+まあ）	54.8%	42.4%
・好き：理科（とても+まあ）	50.0%	39.2%
・好き：先生が黒板を使いながら教える授業（とても+好き）	83.1%	72.0%
・好き：ドリルやプリントを使ってする授業（とても+好き）	65.2%	54.4%
・生き物や自然を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる（よく+時々）	77.8%	63.2%
・科学の発展や技術の進歩を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる（よく+時々）	80.5%	65.6%
・数学の考え方や解き方を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる（よく）	28.6%	16.0%
・数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ（よく）	22.5%	11.2%
・自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う（よく）	47.3%	32.8%
・英語を使って外国の人と話したり、手紙やメールなどを書いたりしてみたい（よく）	34.0%	24.8%
・世界には貧困や差別に苦しんでいる人々がたくさんいるんだと感じる（よく）	51.1%	27.2%
・いい友だちがいると幸せになれる（とても）	78.3%	52.8%
・日本は、競争がはげしい社会だ（とても+まあ）	82.1%	69.6%
・将来、一流の会社に入ったり、一流の仕事につきたい（とても）	35.8%	24.0%

図11 好きな教科・授業

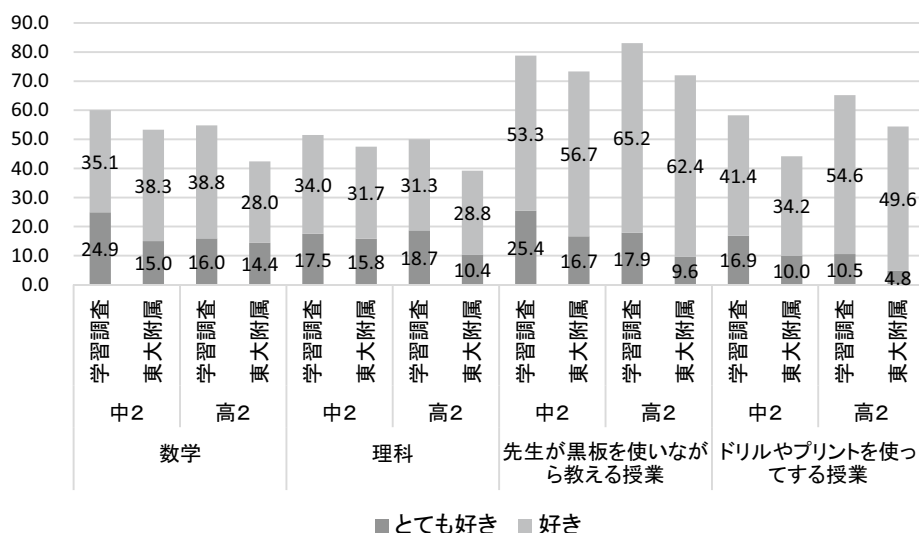


図12 次のように感じることがあるか

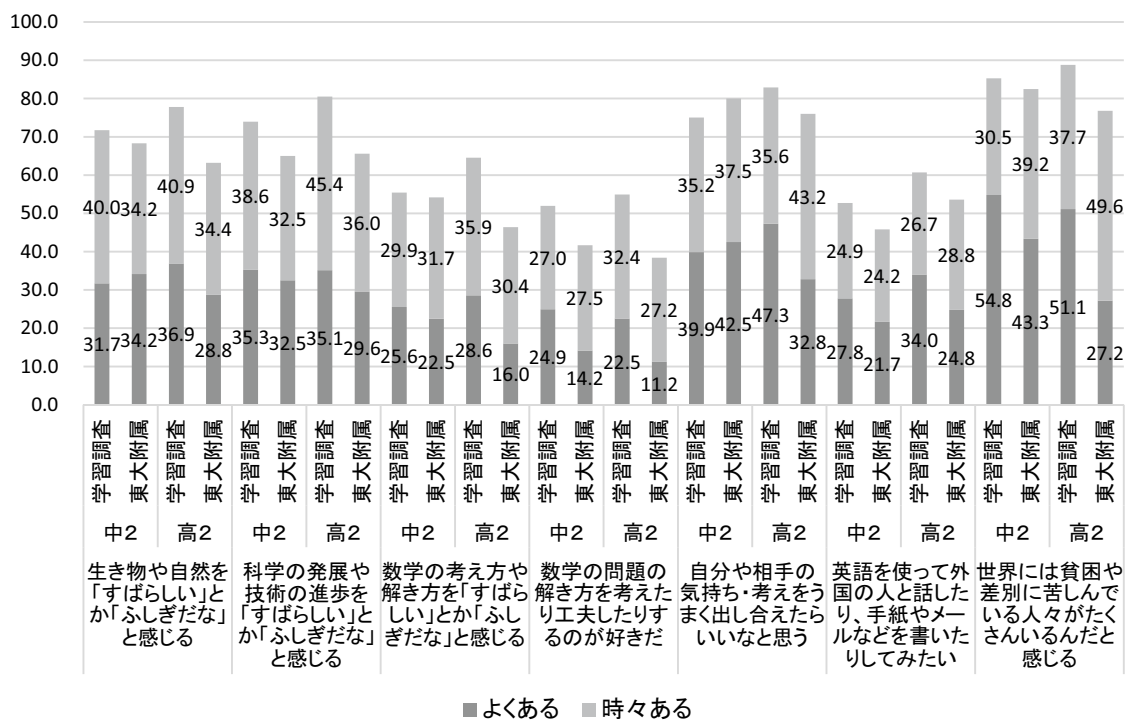
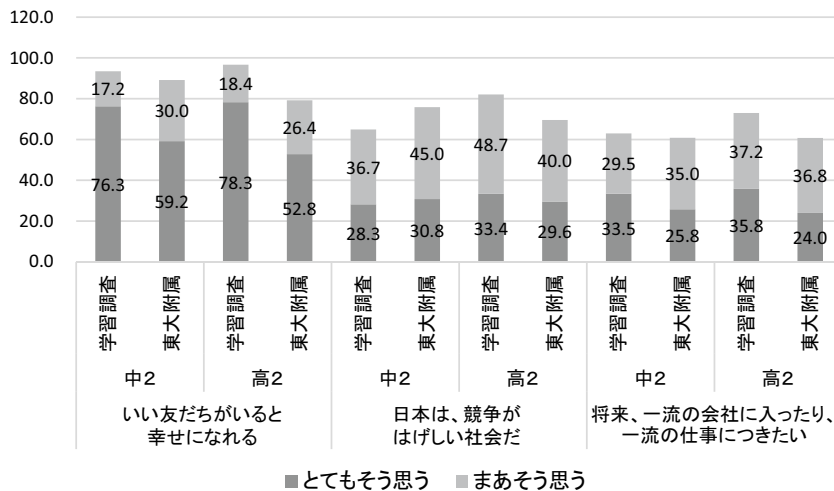


図13 次の意見をどう思うか



2年生（東大附属では5年生）時点でさらに明確化している傾向がほぼ共通に見いだせる。2節でも触れたように、ここには、特定の性質をもつ生徒が東大附属を受験していること、東大附属の入試における選抜基準、東大附属に入学したことによるチャーター効果、東大附属の中で教育を受けることによる効果などが混在していると考えられ、それらの弁別は本稿の範囲を超える課題である。

以上では、意識項目を検討の対象としてきたが、最後に、肯定率という指標は使用できないものの、意識ではなく行動に関する東大附属の生徒の特徴をみることができる項目として、勉強時間の分布を検討する。

図14・図15は、ふだん（月～金曜）の、学校の授業以外の勉強時間（塾や家庭教師を含む）およびそのうちの学校の宿題が占める時間を、学習調査（大都市の公立中高生、高校生は偏差値50以上）と東大附属との両者について示している。図14では、東大附属の勉強時間が学習調査の対象と比べて少ないほうに偏っていることがうかがえる。高校2年生については東大附属で「無回答・不明」が多くなっているため注意が必要だが、およそ30分未満の勉強時間が東大附属でやや多い。

図14 ふだん（月～金曜）の学校の授業以外の勉強時間（塾等を含む）

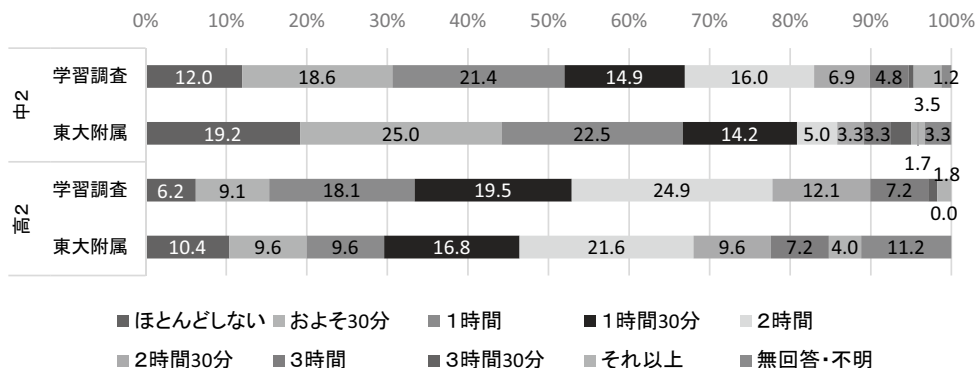


図15 ふだんの学校以外での勉強時間のうち、学校の宿題をする時間

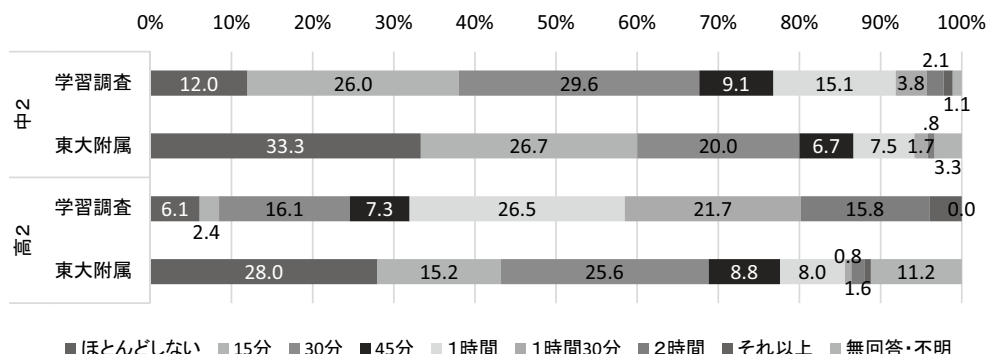


図15の宿題についても、東大附属で「ほとんどしない」比率が学習調査よりもかなり多くなっており、これは学校が義務的な宿題をあまり出していないことが影響しているものと思われる。逆に学習調査では特に高校2年生に関して学校の宿題にかけられる時間が1時間以上の場合が7割近くを占めており、偏差値中位以上の公立高校では宿題の負荷がかなり大きいことがわかる。本稿では勉強時間や宿題の是非の検討は行わないが、学校の方針が相当に異なっていることのみを確認しておく。

4. 東大附属在校生の特徴

以上、本稿では、東大附属の在校生調査結果を他の2つのより広い範囲を対象とする調査との間で比較することを通じて、東大附属の生徒の一端を把握することを試みてきた。そこから見いだされたことは、以下のようにまとめることができる。

第一に、東大附属の生徒には、「探究性」への志向性の強さが明確に見いだされる。それは、生活調査を用いた全学年での比較においては特に1年生と6年生で強く表れており、また2年生と5年生について比較した学習調査との対比ではこの両学年について認められた。すなわち、東大附属の特に1・2年生と5・6年生については、「探究性」つまり新しいことを調べてまとめることが得意でかつ好きであるという特徴が観察された。その背景としては複数の要因の可能性が考えられるが、本稿では特定するにはいたっていない。

第二に、他方で「市民性」「協働性」に関しては、東大附属では特徴が明確に見いだされないか、もしくはより広範な同年齢層よりもやや低い傾向が、今回の

比較では表れていた。ただし、比較のために抽出された項目の数は少なく、それらが東大附属で形成を目指す「市民性」「協働性」の概念に正確に合致しているかどうかについても留保が必要である。

第三に、東大附属の生徒の「探究性」への志向性が強いことの裏返しとして、伝統的な教授方法を用いた授業や、理系科目については、やや消極的である傾向が認められた。

第四に、職業展望、社会の現状認識や将来へのアスピレーションに関する複数の項目でも東大附属の特徴が散見された。職業展望については明確であり、経済的余裕の効用については強く認識し、貧困・差別や競争の存在については認識がやや弱く、地位達成についても同調する傾向がやや弱いことがうかがわれた。

第五に、東大附属の生徒は、家庭学習時間や学校の宿題をする時間はやや少なめである。

以上より、東大附属は教育目標として掲げる「探究性」「市民性」「協働性」のうち、特に「探究性」に関しては、生徒に強く意識づけることに成功していることが示唆される。

本稿の課題として、比較のために使用した共通項目の内容の妥当性、比較対象のスクリーニングの妥当性、10ポイントの差があることを基準とした項目抽出の妥当性などについて検討の余地が含まれていること、また東大附属の生徒の特徴がいかなる要因によるものであるかは特定できていないことなどが挙げられる。

今後は、パネル調査データの蓄積を通じた、東大附属生内部の経年変化やその規定要因などの分析を進展させることがプロジェクト内で予定されている。それと並行して、より精緻な方法を通じ、東大附属以外の教育機関や生徒との比較を引き続き試みることによ

り、東大附属特有の教育効果の把握に取り組むことも必要である。

Meyer, J., 1970, "The Charter: Conditions of Diffuse Socialization in Schools", in Scott, W., ed., *Social Processes and Social Structures*, Holt Reinhart & Winston.

注

- 1) 本稿の分析に際して、第1回東大附属在校生パネル調査のデータを使用することについて、東京大学教育学部学校教育高度化・効果検証センターおよび東大附属中等教育学校より許可をいただいたことに感謝する。
- 2) この報告書における東大附属における「探究性」「市民性」「協働性」の定義は以下の通り。「探究性」：[個人で・他者と] a. 自分が知りたい、解決したい「問い」を見つける b. 学ぶ中で新たな課題を見つけてそれを追究する c. 新たなことを見つける・創造することをおもしろがる d. 適切な手段・方法で必要な情報を収集する e. わかったこと、学んだことを論理的に適切な方法で整理・分析する f. 他（の生徒）の考えや意見をよく聴く g. 自分とは違う考えや意見に関心を持ち多面的にものごとを考える h. わからないことに耐え、どうしたらいいかわからないことをどうにかしようとする i. わかったこと、自分の考えをわかりやすくまとめて伝える 「市民性」：a. 未知なこと、不思議なこと、困難なことに興味を持ち、探究していこうとする b. 他人事（ひとごと）を自分事としてとらえようとする c. 自己を反省し、社会の中での自己の位置を知ろうとする d. 批判的・論理的に思考しようとする e. 専門性はなくとも、関わり、自分の考えや意見を表明しようとする（アマチュアリズム） f. 多様性（ひと・もの・こと）を許容する g. 多様な他者を認めた上で、他者の意見を聴き自分の考えや意見を伝える中で一緒に考えたり、活動したりしようとする 「協働性」：a. 他（の生徒）の考えや意見をよく聴く b. 自分の考えや意見を他（の生徒）にわかりやすく伝える c. 考えや意見の（違いをおもしろがり）違いは違いとして受け入れる d. 考えや意見の違いを理解した上で考え合う e. 感情ではなく、論理的に考えや意見を述べ合う f. 他（の生徒）の意見や工夫を自分の考えや意見、発表等の参考にする
- 3) 生活調査の概要や結果は、ベネッセ教育総合研究所（2015）を参照。学習調査の概要や結果は、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所共同研究プロジェクト「子どもの生活と学び」のサイト（<https://berd.benesse.jp/special/childedu/> 最終アクセス：2018年10月1日）を参照。
- 4) ご依頼に応じて集計を行ってくださったベネッセ教育総合研究所主席研究員の木村治生氏に心より感謝する。
- 5) 男女間の相違も検討したいところであったが、生活調査における国立もしくは公立中高一貫校のケース数が限定的であるため、今回の分析では断念した。

文献

- 東京大学教育学部附属中等教育学校, 2018, 『文部科学省研究開発学校 平成29年度 研究開発実施報告書（第2年次）』。
- ベネッセ教育総合研究所, 2015, 『「第5回学習基本調査」報告書』。
<https://berd.benesse.jp/shotouchutou/research/detail1.php?id=4862>（最終アクセス：2018年10月1日）